

同じ過ちを繰り返さないように木熊は絵になるかどうかより水はけの良いできるだけ平らな場所を選ぶことにした。そうなると適地は限られる。家を建てるための重機を入れられるようにつくった駐車場は厚く碎石を敷き詰めているので水はけもよく条件は満たしているのだが、なんせ殺風景この上ない場所なのだ。植物を植えようにも碎石を掘り返して土を入れなければならぬので手が出せないままでいる。そんなところに木熊を積んでもなあという気持ちは捨てて実を取らなければ冬場の良い薪が手に入らず薪を買い続けなければならぬことになる。

それに、この頃になると町内のMさんが、「石塚さん、薪にする木はいらないかい。」としきりに声をかけてくれるようになってきた。あちこちから「冬になる前に、この木を切っておいて欲しい。」という依頼があつて、切った木の始末に困っていたこともあるのだらうけれど、ありがたい話で断る理由がなかった。そういうしているうちに秋も深まるころには、大小の丸太や枝が敷地に山積みになってしまい、それをなんとかしなければ冬の除雪に支障が出る状態になったという事情も後押しした。

積む場所を決めるのも周りの風景など手がかりがないので、とりあえず車の出入りの邪魔にならないところにした。場所が決まればこれまでの試行錯誤の積み重ねがあるので手早く積むことができた。いただいた丸太などで薪はたくさん出来たので、結局、三基つくることになった。それに、作り方の情報にならなくて木熊の中の空洞は細い枝をぎっしり詰めて崩れにくくしてみた。

出来て見ると、これまで見て見ぬ振りをしてきた殺風景な駐車場に何かしら表情が生まれてきた。特に、そのうちの一つを枝を主に積んだ木熊にしてみたのだが、これが柔らかな曲面をつくってなかなか良いのだ。木熊の姿が映えない場所だと思っていたが、逆に木熊が風景をつくる力があつたということだ。

よくデザインされたランドスケープというのはいろいろある。特に田舎暮らしとガーデニングは対のような関係に捉えられる。しかし、この湿地同然であった敷地で絵に描いたようなガーデニングは無理だし、そもそもあまりする気もなかった。一方で、日々の生活の中で必要とされるものが巧まずに優れた風景をつくるということがある。小さな農村や漁村には、そのような風景をまだ見ることができが、ここ竹山でのランドスケープデザインのひとつの方向性が見えてきたような気がした。

一冬越して、春先になっても水に浸ることもなかったし、崩れてもいなかった。少し気温も高くなり始めた頃、枝を積んだ木熊の足元から小さな動物が顔を出しているのを見つけた。野ネズミだ。ネズミといっても大型の灰色のネズミではなく、小型で茶色の愛らしい表情のネズミである。そのネズミは木熊の中から周りを伺うとちよこちよこ足早に外に出てきた。と、続いてその後を追うようにもう一匹。さらにもう一匹。この木熊は冬場暖かく安全に暮らせるネズミ一家の住処になっていたのだ。これはまずい。

